室町時代の最高級ティッシュペーパー
薄くて柔らかくて丈夫な紙です

やわやわ ― 吉野紙

漆を漉す際にこの「やわやわ」に入れて絞ることから
「漆(うるし)こし」とも呼ばれる。

奈良・吉野

この白雪という紙は別名やわやわとも呼ばれ、昆布尊男さんが漉いています。昆布というお名前なのに吉野の山にいるのがなんとも面白く、初めてお会いしたときに「海側のご出身でしょう?」と聞いてしまいました。やわやわは室町時代に起源を持つ、最高級ティッシュペーパーです。薄くて柔らかくて、室町時代の貴族の優雅さに感じ入ります。極薄なのに粘り強さを持ち合わせ、その上、目が細かいことから、漆こし紙や油こし紙として使われてきました。和紙は薄くても丈夫なものなんです。不織布の登場以来、すっかりお役を奪われてしまいましたが、漆芸作家の方が「本物の漆こし紙がここに売っているんですね」と感激したように言いながら買っていったことがあります。もったいなくて使えないかもとおっしゃっていましたが、ぜひ古から受け継がれてきたやわやわの使い心地を試していただきたいものです。

最後の紙漉きから役所勤めの女性へのバトン渡し
ユニークな製法が生む素朴な楮紙

高野紙

中坊さんの高野紙(左)と飯野さんの高野紙(右)。

和歌山・高野町

87ページで紹介した埼玉の小川和紙は、和歌山の高野山麓の細川村で漉かれていた丈夫な和紙の漉き方が伝わったそうです。そのオリジナルである高野紙は、最後の漉き手だった中坊佳代子さんが15年ほど前に引退したことで、一度途絶えかけました。切れかけた細い糸をつないだのは高野町の職員で、町史編纂室を経て教育委員会で働いている飯野尚子さんです。働きながら中坊さんを訪れてさまざまに質問し、漉き方を修得しました。高野紙は小判しか漉かない特殊性があり、13枚の萱簀を用意してどんどん漉いて濡れたまま立てかけておく、板干しする時も刷毛を使わずに周囲を手でなでるなど、素朴なまま進化を止めました。そういう百姓的な紙だからこそ、飯野さんが働きながら挑戦できたという側面があると思います。小判なのは傘紙などとして用いられていたからですが、実は高野山には、文書に使われた高野紙がのこっています。それを再現していきたいというのが、飯野さんの思いです。

話　花岡成治（紙の温度株式会社）
城ゆう子（紙の温度株式会社）
文　鈴木里子
紙の写真　井上佐由紀
協力　宍倉佐敏、紙の温度株式会社

ブックデザイン　中西要介（STUDIO PT.）
根津小春（STUDIO PT.）、寺脇裕子
校正　鷗来堂
企画・編集　津田淳子（グラフィック社）

「紙の温度」が出会った
世界の紙と日本の和紙

2022年11月20日 初版第1刷発行

著者　紙の温度株式会社
発行者　西川正伸
発行所　グラフィック社
〒102-0073 東京都千代田区九段北1-14-17
tel. 03-3263-4318（代表） 03-3263-4579（編集）
fax. 03-3263-5297
郵便振替　00130-6-114345
http://www.graphicsha.co.jp/
印刷・製本　図書印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、小社業務部宛にお送りください。小社送料負担にてお取り替え致します。
著作権法上、本書掲載の写真・図・文の無断転載・借用・複製は禁じられています。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

ISBN978-4-7661-3671-5 C3070
Printed in Japan